



# 「防災塾・だるま」をハブに —学びと実践、発信、連携、提言の サイクルづくり



神奈川県横浜市 防災塾・だるま  
塾長 鷲山 龍太郎

## 1 学び・発信・実践・提言の サイクル

私たち「防災塾・だるま」は、地域防災のさまざまな課題を“学びの場”で明らかにし、“現場での実践”を通して検証し、その成果を“連携の拡大”へとつなげていく。そして、さらに“提言発信”として政策や制度の改善を目指すという、循環型のプロセスを築くことを目標に取り組んできました。今回の第30回防災まちづくり大賞会長賞の受賞は、私たちの長年にわたる多角的な活動の方向性が高く評価されたものだと考えています。

以下に本会の四つの実践ポイント（学習・実践・連携・提言のサイクル）を示します。

## 2 活動基盤の 「防災まちづくり談義の会」

第一のポイントは継続的な学習の場の提供です。防災には知識や訓練だけでなく、避難支援や情報共有、制度、合意形成など幅広い議論が必要です。研究者や実務家、住民が対等に協議し、課題や今後の取組みを明確にしています。ここで整理した問題意識が実際の活動につながっています。

## 3 学びからそれぞれの地域や 組織での実践に

第二のポイントは、現場実践に基づく検証作業です。机上の理論的議論で終わらせず、フィールドワークを通じて地学的特性や災害履歴を把握し、危険箇所の実地確認、訓練内容への反映を行います。また、

過去災害記録の分析や災害現場での実地観察（被災地調査、防災まち歩き）によって検証し、そのレポートをHPでアーカイブするよう努めます。

## 4 連携の構築による イベントの展開

三つ目のポイントは連携体制の確立です。防災への対応は一つの団体だけでは完結せず、地域社会や学校、福祉関係団体、企業、行政機関などと広く協力する必要があります。当会は、「防災まちづくり談義の会」（防災講演会＋討論会）で培ったネットワークを活用し、「かながわ・よこはま防災減災体験フェア」や「ぼうさいこくたい2023神奈川大会」などを通じて多様な団体と協働しています。こうした活動を通じて、防災の資源や知識を相互に分ち合う取り組みを進めてきました。

## 5 提言へのアウトプット

第四のポイントは、現場で明らかになった制度・課題への具体的な提案です。現行制度や運用の不備を、行政計画や学校・地域との連携が進むような働きかけを行っています。たとえば、学校安全と地域防災の一体化、地区防災計画の実効性向上、訓練・運用の継続可能性の確保など、制度改革を目指した具体策も提示しています。

今回の受賞を励みに、「学習－実践－連携－提言」のサイクルをさらに磨き、防災まちづくりの発展に努めていきます。今後も会員や関係者のみなさんと共に、災害に

強い社会の実現に向けて取り組みを続けてまいります。

## 6 沿革（要約） —設立から現在まで

- ・2005年、神奈川大学生涯学習（神奈川県民大学「地域・防災・まちづくり」）をきっかけに、有志による「防災まちづくり談義を楽しむ会」が誕生しました。
- ・翌2006年には、「災害の教訓を生かして七転び八起き」を理念に掲げ、組織名を「防災塾・だるま」と決めました。「いのちの尊さ」「助け合い」「行政と市民のギャップを埋める」という基本原則も明記しています。

その後、月例の「防災まちづくり談義の会」を中心に、実地調査や被災地交

流、講座運営など活動を広げています。

- ・2011年には活動成果を公開・共有するため専用ホームページを開設し、活動記録や資料アーカイブを継続しています。
- ・2023年には「ぼうさいこくたい2023神奈川県大会」で関連セッションを実施しました。
- ・2024年には、防災まちづくり談義の会が累計200回を突破。
- ・2025年には談義の会総括を「防災庁創設への防災塾・だるまからの市民提言」にまとめ、防災庁設置準備室へ提出するとともにHPで公開。
- ・2026年現在は会員数80名となり、年間6回の「防災まちづくり談義の会」開催をはじめ、多様な活動を展開しています。



200回を超えた「防災まちづくり談義の会」



関東大震災100年横浜被害を検証する  
防災まち歩き



「かながわ・よこはま防災減災体験フェア」  
での防災実験ブース



「ぼうさいこくたい2023神奈川県大会」  
で多様な連携でセッションを展開